

世の中に理想理念を考える土壌を どう定着すべきか

理想をどう考えるか。まずは人間性が前面に出るべしと考える。というのも、技術は人間幸福への支援そのものであるから、理想は本来のテーゼを明確になるようにしたいものである。しかしながら、技術の支援としても分断系の中では、本来のテーゼが見えてこない。だから、そうしたことが見えるように、ということである。以下に、社会や生活それに教育の視点で述べたい。

(1) 一般論として

- ・人間主体の明確化: 人間によって作られた体系は人間のために運用となり、その際には当然人間がかかわっていることはいまでもない。しかし、体系について運用の仕方ひとつで、人間の姿が霞むことも多々ある。例えば、効率化や管理という側面が強すぎると、そうなるのである。そこで、体系と人間の間には自由なかわりありという大前提を日常化したいものである。

- ・全貌を展開: 今の世の中、とにかく全貌を見ることが極めて少ない。こうした風潮では理想を展望することも発議することもできないと考える。よって、(教育もろもろの)全体を構成する部分に精通している場合であっても、各自考えの立つ位置を相対化することが求められるのである。これがなされれば、たとえ全貌に精通しなくても、全貌をみずえていることになる。

(2) 教育における理想の扱い

- ・教育は知識偏重にならないようにといったことが言い続けられ、知恵の教育とか、創造性教育とか言われ続けられているが、不思議なことに理念理想がほとんど扱われていないといっても過言ではない。今の時代、教育は時代の波に乗る(あたかもサーファー養成か)こと、時代のニーズをキャッチできることといった能力開発がもてはやされている。ではどうする。上記項目で述べたように、人間を + アップすればいいだけのことである。

(3) 日常生活の営みから。おわりにとして

理想理念について日常から身近にしておきたいといいたい。理想を論として展開するのみではなく日常論とすべきであり、その意味で特別に理想に関する教育はあってもいいが、必ずしも必要ではなく、日常の生活の営みそのものが健全であればそれでいいといいたいのである。さすれば、相互尊重、人格磨きといった人間性の充実はいまでもなく、何のための人間性かということが当たり前となり、これがここでいう体系と人間との間のかかわりを自由にしていくものと考え。理想は各自に備わる人間性そのものなのである。

<追加>この種の問題について、とっさに語った事例として技術と人間という観点でごくごく一例を記す。富山では江戸期安政地震で鳶山崩壊の堆積ダムが決壊で下流域が大被害であった。この時、安全宣言に地元技術者が現地踏査を行い、安全宣言を出した。その背景には、技術者の市民による信頼があった。こうした事象をつまびらかにする、ということも教育のひとつにした

い。

AI で技術者も不要時代を迎えるのか

これについて、二つの考えを持っている。

(1) ひとつは不要時代はないという考え。

AI や BIM であっても人間が作っている以上、システムには枠が設定されることになる。対処する問題がその枠を超えた場合には人間の判断が求められよう。また問題が枠内にあっても、至れり尽くせりが単なる便利さに過ぎないと考える。あくまでも人間中心の考えである。

(2) 今ひとつは人間中心での再考。

まず人間一般社会から論ずる。人間不要時代が到来したとき、システムによる種々享受には、何の反応もせず受け入れる場合と受け入れに際しても個性的に選択吟味の場合とがある。私は、前者のような受動的社会はありえず、後者の場合があると思っており、欲求即提供(何かを欲しいから何かが即提供されるという意味)ではなく、その過程がブラックボックスではなく、また何かしらの選択が可能と考える(いくつかの提供メニューがあってそこから選ぶという意味ではない)。この場合、要求から提供までの過程において、システムへの自分流のかかわり方があり、そこにはシステムの全貌の展望とかかわりに関する流れの(ある程度の)理解が必要であり、その意味では、オールマイティシステムからパーソナルシステムとして人間が部分的にかつ脈絡思考が可能となるようになる、行為して人間が ai 時代を作っていくべきと考える。

次に設計技術について。工学における各種の設計では CAD を超えて BIM(Bिल्ディング インフォメーション モデル)、があり、これがボットと連動して、設計から生産までのオートメ化まもう間もなくやつきそうである。実際の設計では、すべて設計条件を満たすことで最適というかニーズに応じた設計が BIM で出来たとして、要求側のニーズを満足してるから何ら問題無しということになる。しかし、最適設計を受け入れるとき、人間がこれを理解するときには、結果の通り人間が理解すべき、ということにはならず、理解のための結果の解釈が必要となるとき、要はパーソナルなかわりを求めるときには、人間側で思考が必要となるはずである。前述のように一般社会の場合と同様、技術万能社会における人間のかかわりがあることが出来る。要は、「これどう、あれどうといった」AI 側からの要求即提供ではなく、「いつまでもこれはこうしようか、あれなら」といったパーソナル行動は人間特有の本質であり、これが過剰提供や提供の選択唯一ではないということを手帳しておく。

(3) 以上のように、問題を 2 ケースに分けて論じた。あくまでも人間主体の構図は変わらないということ、状況分析により説明した。AI 時代だからこそ、人間が労働をロボットや AI にまかせてということがあっても、そこには人間がスタートランナーでありかつエンドユーザーでもあるという事実が、人間主体が如何なる場合にも成立する思想なるということを手帳した。これをもってまとめとしたい。